

文化映画紹介

「助ける、助かる 検証 西日本豪雨」

映学社作品

渡部美

【スタッフ】企画・制作統括／高木裕己 脚本・演出／川崎けい子 撮影／金山芳和、宇都宮俊治 イラスト・CG／正者章子 ナレーター／中村久美 協力・画像提供等／大洲市、三善公民館、三善自治会、気象庁、国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所、ピクスタ 監修／東京大学大学院情報学環総合防災情報研究センター特任教授・片田敏孝 企画・制作／映学社 完成／2019年 DV D作品 22分

【内容】2021（令和3）年7月3日、静岡県熱海市伊豆山において豪雨による甚大な被害が発生した（令和3年7月伊豆山土砂災害）。その豪雨は予想を上回る土石流災

害を引き起こし、死者は21名（7月26日時点）を数えた。土石流とは何か？ それはニュース映像でも流されたが、土砂と水が混じり合って山の上から下ってきて、猛烈な勢いで、車も建物も瞬間に押し流した。地震が頻発する日本では津波などの猛威が記憶に新しいが、土石流災害は豪雨によるものとして改めて注目せざるを得ない災害であった。今回、ご紹介の「助ける、助かる 検証 西日本豪雨」は、その豪雨災害の脅威と予防、避難の在り方を災害当時の映像、被災者たちの取材によってまとめた作品である。映画はひとつの事例を示す。2018年7月に西日本を中心とする幅広い地域で豪雨災

害が発生した。そのときの犠牲者は200名を超えた。これは平成時代、最悪の水災害と言われた。そこで災害に襲われた広島市が紹介される。場面には市の三篠川に架かっていた鉄橋が流失した現場を写し出す。鉄橋は頑丈で、よもや水、川の勢いによって流されないであろうと考えられていたが、画面に見られるのは、押し流されて破損し、川べりにそのまま置かれていた鉄橋の橋脚である。豪雨、水害の恐ろしさを目の当たりにする感じである。

映画はこのように現場の動画と写真で報道性を誇示しつつ、一方では平明な図解のアニメーションによって水災害の起こる原因を説明していき、

豪雨の説明も明快である。なぜ、豪雨が起きるのか？ それは積乱雲によるものだ。積乱雲が発生し、上空の風に流されて、激しい雨を降らせながら、風下に移動していく。すると風下側で新たな積乱雲が発生し、また風下に移動する。こうして続々と生まれた積乱雲が一直線にならび、長い時間、同じ場所に激しい大雨が降り続く。この大雨の領域を「線状降水帯」と言う。映画はこうしたことを絵も交えて説明していて、きわめて分かりやすい。ちなみに今年（令和3年）7月伊豆山土砂災害の報道に際しては集中豪雨において「線状降水帯」の名称がよく聞かれた。

水害は一瞬の破壊力を持つ

水害は豪雨だけではない。洪水も重要な災害である。この映画では私たちが水害をただ漠然と見て、知っているだけのレベルから、その水害は具体的にどのようなものなのか？ との疑問に明確な名称を与えることで、水害の知識を一步、深めてくれるようである。例えば「洪水災害」であるが、より具体的には川の水が溢れ出したり、堤防が壊れて水が外に流れ出すことを「外水氾濫」という。

また、川の水が溢れなくても住居地が水浸しになることがある。これは大雨によって地表の水が急激に増してしま



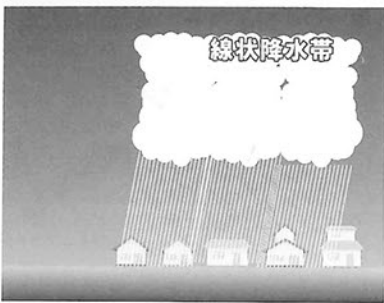
広島市安佐北区

土砂災害

うと排水が追いつかず、下水管などが溢れてくる。そうかといえ、川が増水して街に降った雨水を川に流すことが

できなくなってしまおうと、住居や道路、田畑などが水に浸かってしまうことがある。これは「内水氾濫」といわれて

いる。「外水氾濫」と「内水氾濫」の両方が発生することがしばしばあり、大きな災害をもたらすと映画は指摘する。画面には水にどっぷり浸ってしまった街などの写真が示されるが、そのまったく世界が変わってしまったような街の雰囲気には唖然とさせられる。そこで今年、令和3年7月伊豆山土砂災害も生々しい、土砂崩れの災害であるが、この映画は土砂崩れを詳細に紹介している。土砂崩れは斜面崩壊（崖崩れ）とも言われる。斜面崩壊は雨などによって土の抵抗力が弱まり、急な斜面の地表に近い部分が一瞬のうちに崩れ落ちる現象のこと。



線状降水帯

また土石流は山などが崩れて生じた土砂や岩石、樹木などが川の水と一体となって一気に下流に流れ落ちる。土石流は一瞬のうちに建物などを壊滅させるのだ。ここで画面は土石流そのものを映像（記録映像）で見せるのだが、これも脅威としか言いようのない驚くべき急激な破壊力である。今回、この映画を観て感じること、水害というものは、環境を破壊するに至るまでの時間の推移も重要だが、どうも水害は一瞬のうちに、その場所のあらゆるものを根こそぎ奪っていくような、理解しがたい印象を与える。なぜ、土石流が脅威的な破壊力なのか？ 画面で説明される土石流では、そこに交じっていた石の中でも岩が風化して、硬い部分が残ったコアストーンという大きな石が住宅を直撃するというのである。水害写真を見れば、コアストーンが水の勢いで住宅の庭先、ガレージにまで押し寄せ、自家用車と比してもかなり大きい存在を主張していることが分かる。

これは不気味な光景である。日本の大都市の多くは河口周辺に立地し、市街地は海面より低い、0メートル地帯に広がっていることも少なくない。台風で高潮が発生し、さらに大雨で川の水が増水し、堤防が決壊した場合、膨大な量の水が市街地に流れ込み甚大な被害となることは明らかであろう。さらに地球温暖化の影響で、今後ますます激しい大雨の頻度が増えていくことが懸念される。

しかし映画は最後に、それでは水害時にはどのような備えをしたらよいか？ という防災エピソードも、被災地の住人たちに取材して丹念に聞き出している。避難準備、避難勧告、避難指示（緊急）といった要点ごとの説明、インターネットやスマートホンの活用、地域ごとのハザードマップの作成などだ。この短編映画はバランスの良い構成で情報量も多く、防災の知識を得るには最適の作品である。問い合わせ先／映学社 03-3335919279